

<研究論文>

家庭科教育における「こどものまち」活動の展開可能性

—学生スタッフへのインタビュー調査を通じて—

An Extensibility about “Children’s town” in Home Economics Education

-Analysis of Interviews with Staff Members of University student-

花輪 由樹

Yuki Hanawa

本研究は、住まいへの主体的な関わり方について、家庭科における展開の手がかりを探ることを目的とした。そこで子どもが街をつくる活動に注目し、そこに関わる学生が子ども観や子どもを主体的に活動させるサポート方法をどのように学ぶのか、インタビュー調査より探った。学生達は子どもへの対応の難しさを抱く一方、子どもが予想外に行動できることを評価しており、子ども観の変化がみられた。また街の仕組みや子どもへの対応マニュアルがないと、サポートが難しい学生もいた。したがって継続的な関わりによって、その時々生まれる子どもの気づきを軸にできる人材を育成することが今後の課題となる。

キーワード：家庭科教育、こどものまち、学生スタッフ、子どもの主体性

1. 研究背景

(1) 世界各地に広まる子どもが街をつくる遊び

1979年にドイツのミュンヘンで始まった子どもが街をつくる遊びは、世界中にその活動が広がっている。ドイツ語では‘Spiel Stadt’（遊びの都市）、世界各地では‘Play city’、‘Mini-city’と呼ばれるが、子ども自身が街をつくるその主役であることから‘Children’s city’（子どもの都市）、‘Children’s town’（子どもの街）と呼ばれることもある。日本では「こどものまち」と称され、その活動が集約された2010年時点の書籍¹には全国30地域での開催が記載されている。しかしそれが今では全国約200地域ほどに広がって開催されていることが、毎年開催される「全国こどものまちサミット」などで確認されている²。日本では1997年に高知県香北町で「ミニ香北町」が一時的なイベントとして開催され³、その後2002年に千葉県佐倉市で「ミニさくら」が継続的に開かれていくようになると全国各地に広がっていった。このように、ドイツでは1979年より約40年、日本では1997年より約20年を経た時間の中で、この子どもが街をつくる遊びの活動が続いている。

ここでの遊び内容は、子ども達が仮想都市の中にある仕事場で働いて銀行で給料をもらい、その資金で自分の好きなモノやサービスを購入していく生産・消費活動の他に、街を運営していくために必要な市民集会や市長選挙などの市民活動に参加したり、街の運営が気に入らなければデモを起こしたりするなどの活動も存在する。この遊びを成立させるために、サポートとして大人が入っているが、子ども達が主役の

子ども達による遊び場ということを重視するために、大人側は極力口出しをせず、困ったときに助けるというスタンスでの参加となっている。

(2) 「こどものまち」の作り方

筆者の調査によれば、「遊びの都市」の元祖であるドイツの「ミニ・ミュンヘン」は開催期間3週間の中で、都市としての大きな枠組み自体は大人が決定する。その後、大人が決めた枠組みの「都市」で子ども達が遊び、もし不具合があれば、その期間中に子ども達自身で、市民集会や市議会などを開催して多数決の原理によって変えていく民主主義教育の環境が設定されている。

一方、日本の場合は、数日間の開催期間となっている場合が多い。そのため、子ども達自身に「まち」を作ってもらったり、作り変えてもらう機会は、開催期間の前後に設けられている。例えば子ども実行委員会などが立ち上がり、そのミーティングが開催前に何度か開かれることが一般的である。そして、都市としての大きな枠組みを、大人のサポートのもとに作り上げていく。「まち」をつくるにあたって、大人がどの程度入り込み、また子どもにどの程度意見を言ってもらうのかは、各「まち」がどのようなスタンスで開催しようとしているのかによって違いはあるが、日本の場合は、ゼロから自由に自分達のつくりたい「まち」を創造させることが多い。

(3) 「こどものまち」と学校教育との繋がり

日本の「こどものまち」は、主に小学生を対象としている地域が多い。全国的に約200箇所ほどの「まち」が開催されてきていることから、「こどものまち」に関わる経験者も年々増加しているといえる。また「こどものまち」の中には、都市の仕組みや、市民活動、職業活動、消費活動など様々なことを学ぶ機会がある。これらは小学生にとって学校外の学習機会の場ともなっていることが想定できる。

今後も、この活動が全国的に普及し、また継続していくことを考えると、学校での知識学習の活動と学校外での体験活動とがリンクしていくことが、子ども達の住まいのあり方を学ぶ場として重要であることが考えられる。

自分の住んでいる地域に関する学習は、社会科や生活科などで学ぶが、その他にも家庭科（衣食住、家族、消費生活、環境がテーマとなっている）にもその領域が存在する。2017年に告示された小学校家庭科の新学習指導要領⁴でも、家庭生活が支えられている地域について生活課題を発見させる形で教えていくことの必要性が触れられている。これまで家庭科は、家族や家庭生活のあり方を中心に教えてきたが、地域という範囲についても自分の生活の一部として積極的に関わりをもつような学習指導が求められてきているのである。しかし自分の住む地域に対して主体性を育む指導というものには、まだ研究の余地が残されていることが考えられる。

2 研究目的と方法

(1) 目的

本研究は、家庭科教育において自分が住む場所への主体的な関わり方を指導するために、子どもが街をつくる遊びである「こどものまち」活動に注目し、子どもが主体的に地域に関わる視点や、そのような住まいにおける態度を大人側がどうサポートできるかについて探ることを目的とする。

(2) 方法

研究方法としては、サポートスタッフである学生に注目し、①子ども観をどのように身に付け、②子どもの主体性を尊重する態度をどのように獲得することができるのかを、インタビュー調査より分析した。なお今回は、実際に当日スタッフとして「こどものまち」に関わった、小学校教諭の免許取得を目指す学

生を対象とした。

3 研究結果

3-1 調査概要

本研究は、2017年11月5日に開催された「OSAKA☆みらいシティ」に参加した、小学校教諭の免許取得を目指すH大学の学生17名を対象に、インタビュー調査を行った。調査日は「まち」が開催された当日に、スタッフとしての仕事が空いている時間に個別に1人15分ほどの時間をとってもらい、以下6つの質問について半構造化インタビューを行った(表1)。なお調査時には、この内容を論文として掲載することもあることを伝え、了承を得た。

表1 インタビュー内容

Q1.今回参加してみて大変だったことはあるか
Q2.もっとこうしたらよいのと思うような課題はあるか
Q3.「こどものまち」という全体の様子をみた感想はどうだったか
Q4.今回参加してみて楽しかったことはあるか
Q5.各ブースのことや街全体、子ども、大人のことなど、全てについて「これはすごいな」と思ったことはあるか
Q6.また機会があれば次回も参加してみたいか

3-2 開催概要

「OSAKA☆みらいシティ」は、今回初めて開催される「まち」で、大阪市内在住の小学校1年生～6年生の500名を対象としたものである。しかし事前申し込みの抽選制度があるため、たとえ友人や兄弟で申し込んだとしても抽選漏れにより、一人で遊びに来る子どもも存在するような状況であった。

当日関わる大人スタッフは110名おり、大人の専門家が出すブースのスタッフ(①おとな店長)と、子ども店長が出すブースのスタッフ(②まちえもん)と、「まち」全体に関わるスタッフ(③区担当スタッフ)とに分かれていた。今回学生達は、②まちえもん、③区担当スタッフとして関わった(表2)。

スタッフの事前説明会はイベントの1ヶ月前に2回開かれており、そこには学生達も参加している。またその説明会では、①当日の流れや、②「まち」の仕組み、③大人スタッフがサポートする内容などが説明された。

①当日の流れについては、朝8時半頃に集合し、子ども達を「まち」に迎え入れる準備を行い、その後、混乱やケガなどがないように子ども達を入場させて、仕事をしたり消費活動ができるようにサポートしていくことが指示された(表3)。

②「まち」の仕組みについては、当日だけでなく限られた人数の子ども達が事前・事後学習を行い、「まち」や「仕事」をつくっていることが知らされた(表4)。また、当日遊びに来た子ども達は、仕事をして、その後給料をもらい、消費活動を行う流れがある他に、昼休みには、税金の使い道についてのタウンミーティングが開かれることも説明された(表5)。

③大人スタッフがサポートする内容については、「働く子どもの時間管理」、「働く子どもと子ども店長をつなぐ役」、「子ども店長の相談役」、「困っている子が居る場合にサポートすること」が中心となることが提示された。

表2 大人のボランティアスタッフの種類

①おとな店長	街の中にある大人が立ち上げた15種類の仕事を担当
②まちえもん	当日ハローワークから各店舗に仕事にやってくる子ども達のサポート (働いている時間の管理、仕事カード・市民証の管理、子ども店長やおとな店長と働く子を繋ぐ役)
③区担当スタッフ	当日やってくる子ども達の誘導や説明、アンケート回収など

表3 大人のボランティアスタッフの流れ

8:15	会場に集合し、子ども達を迎え入れる準備を行う
10:00	子ども達が入場 → 子ども達を250人ずつ入場させ、街の仕組みの説明を受けてもらう → ハローワークにて仕事をもらったら各ブースにて子ども達が仕事をはじめる
12:00	昼食 & タウンミーティング
12:50	13時からの仕事再開に向けて準備&待機
15:30	仕事場が閉店
16:00	エンディング
16:30	子ども達を少しづつ退場させる & 片付け
17:30	退場完了 & 片付け

表4 事前・事後学習の内容

①子どもたちの事前学習会：小学4～6年生 50名（応募者数250名から抽選） 10月9日：理想の「まち」を考え、「仕事」をつくる 10月22日：「まち」の準備をする
②当日のまち：小学1～6年生 500名（応募者数3700名から抽選） 11月5日：つくった「まち」を体験
③子どもたちの事後学習会：小学4～6年生 50名 11月12日：「OSAKA☆みらいシティ」のふりかえり 12月9日：リアル大阪への提案

表5 子ども達の当日の遊びの内容

①ハローワークで40種類程の中から、自分のやりたい仕事をする（40分コース or 60分コース）
②仕事後は、銀行で給料をもらう（お金の単位＝ミライ：40分で400ミライ、60分で600ミライ）
③給料の中から、税務署で50ミライの納税を行う
④再び仕事をしてもよいし、何か自分の好きなものを買ってもよい
⑤街が休止する昼休みには、税金の使い道についてのタウンミーティングに参加する
⑥余裕のある子は、起業も行う

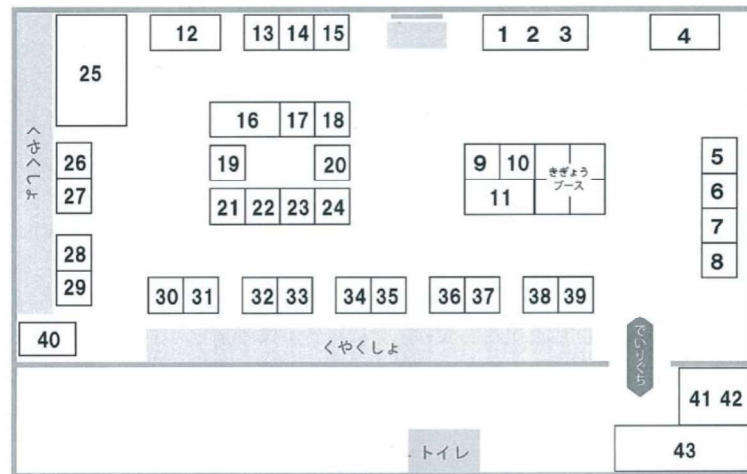


図1 当日の会場配置図（説明会での配布資料より）

表6 子ども達が体験できる仕事内容

1 市役所 広報課	16 デパート	31 本屋さん～にこにこBOOK～
2 市役所 起業課・相談窓口	17 わたがしやさん～えがおあん～	32 ペットショップ～ペットスター～
3 市役所 掃除課	18 バルーンアート屋さん	33 アクセサリーショップ～カラフルPower～
4 ハローワーク	19 カジノ	34 警備会社～KKFS～
5 銀行～おおさか ぜったいぎんこう～	20 宣伝会社～こどもわくわく☆せんでんしゃ～	35 郵便局
6 税務署	21 リサイクルショップ	36 新聞社
7 薬局	22 おもちゃ屋さん～おおさかトイザラス～	37 写真屋さん
8 病院～O SAKA☆みらいびょういん～	23 フラワーショップ～スマイル～	38 タクシー会社
9 チョークアートやさん	24 映像屋さん～みらいせんでんしゃ～	39 消防署
10 ゲームセンター～O SAKA☆愛ゲーセン～	25 工場	40 プラネタリウム～ミライ☆スター～
11 遊園地～ミライ☆パーク～	26 アクセサリーショップ～Accessory shop～	41 カステラやさん
12 ホームセンター	27 ラジオ局～とみかわ～	42 スナック
13 工房～ふわふわフェルト工房～	28 占いショップ ～URANAI KOKORO～	43 カフェ～ゆっくりCafeもこもこ～
14 看板屋さん	29 ホテル～ジュエル～	
15 病室	30 学校	

3-2 インタビュー結果

3-2-1 インタビュー対象者の属性と担当ブース

インタビュー対象者である17名の学生は全員大学2年生の女性である。彼女達が担当したブースは、1ヶ所～2ヶ所で、「工場」や「ハローワーク」などブースによっては重なる者同士もいた（表7）。

表7 インタビュー対象者の担当ブース

対象者	担当ブース	対象者	担当ブース	対象者	担当ブース
A	カフェ	G	お菓子や	M	市役所・広報
B	税務署	H	ホテル・占い	N	銀行
C	区担当	I	工場・区担当	O	区担当・銀行
D	ホームセンター	J	市役所・起業家	P	ハローワーク
E	工場	K	税務署	Q	ハローワーク
F	工場	L	市役所・掃除		

3-2-2 インタビュー結果

質問への回答として、「Q1. 大変だったこと」、「Q2. 課題と思うこと」、「Q3. 全体の様子をみた感想」、「Q4. 楽しかったこと」、「Q5. これはすごいなと思ったこと」、「Q6. 次回の参加有無」をみていく。

(1) Q1. 大変だったことについて (表8)

大変だったことは、主に自分の対応方法について述べられていた。具体的には、担当ブースの忙しさについてや(回答者A, D, Q)、子どもへの対応について(回答者G, H, I, K, L, N, P)、仕組みや街に対して(回答者E, F, J, O)の回答がみられた。

また自分の予想と異なる状況についての回答(回答者A, B, C, D, E, F, G, H, I, N, O)もみられた。例えば、「けっこう忙しかった(回答者D)」、「声が通らなくて大変だった(回答者H)」、「お金のやり取りが難しいかなと思う子もいた(回答者N)」、「手続きが大変だった(回答者O)」といったように、実際に「こどものまち」に身を置いてみて、自分の行動の仕方を考えさせられる場面があったことがわかる。

またその大変だと思う状況に対して、具体的なアクションを起こせた者には、求人が人数オーバーで「8人以上いたので返した(回答者E)」、「持ってきたものを忘れて帰る子がけっこういたので、市役所までよく行った(回答者H)」、「お昼も一人で食べている子がいたので話しかけたりした(回答者I)」、「やることがない子に「紹介カードを書いてもらったり、ポスターを書いてもらったりした(回答者J)」、「勝手に相手の財布から取ったら泥棒になるよと言ってサポートした(回答者K)」、「お金の忘れ物の対応について「また来てもらうように促した(回答者M)」、「税金の説明し忘れについて「しょっちゅう声かけをした(回答者N)」、「やりたい仕事を見つけられない子に「何が好き?と聞いた(回答者P)」といったように自分なりの対応を模索していた様子がみられた。

以上の結果より、「大変だったこと」として、自分自身の能力の問題や、子どもや街の仕組みといった「こどものまち」ならではの状況への対応に悩む者もいたが、それらについて具体的なマニュアルがない中でも自分なりに大人スタッフとしてのより良い対応方法を見つけようとしていることがうかがえた。

(2) Q2. 課題と思うことについて (表8)

「課題と思うこと」については、主に、各ブースの店のこと(回答者A, G, H, K)、仕組みのこと(回答者B, E, F, I, J, K, L, M, N, P, Q)をあげている者が多くみられた。

またそれらの課題は、大人にとっての運営しやすさを述べている「子どもが働く時間管理(回答者E)」や「仕事のマニュアルの詳細の存在(回答者L)」といった回答を除けば、子どもにとっての過ごしやすさという観点からの課題が述べられていた。例えば、危険性については「タクシーが走っていて危なかった(回答者F)」、「車いすで走ったり、危険な子がいた(回答者I)」ことや、仕事の仕方については「時間がある時は退屈そうだなと思った(回答者N)」、「他にもすることがあった方がよかった(回答者P)」といったように、子どもの視点にたった意見がみられた。

さらに、課題を提示しただけの者(回答者F, G, H, Q)の他に、具体的に「対策案を提示」した者や(回答者B, E, I, J, L, N, O, P)、実際に「対策案を実行」した者(回答者A, K, M)もいたことが明らかになった。

以上の結果より、「こどものまち」でのサポートを通じて、子どもにとっての過ごしやすさや遊びやすさを考えながら、その課題をあげる者が多く、また具体的に対策も自分で考えて実行している者もみられた。しかし課題の中には、細かい指示があった方がよいといったようなマニュアルの必要性を提示している者も何人かみられた。これは大人側の論理からみれば、マニュアルがあった方が管理・運営しやすくなるが、その運営しやすさが「こどものまち」が掲げる子どもの主体性の尊重や子どもの過ごしやすさと対立してしまわないかどうか、といったところまでは深く考えられていないことがうかがえた。

表8 インタビュー結果

対象者	Q1.大変だったこと	Q2.課題と思うこと
A	仕事をやりたい人が途中で一気に入ってきたこと。働きにくるのが同じ時間なので、最初は仕事が回らなかった。	初めから職の役割を決めていた。レジをする人、注文を聞く人、運ぶ人など。でもそれだと責任もたずに、お客さんに商品が行き渡らないこともあったので、自分で聞いた注文は自分で渡すというルートにしたという風に提案した。大人のお弁当の時に配布された飲み物が缶だったのでペットボトルで欲しかった。
B	仕事をしに来た子も、最初の方はやることがなかった。	人数が沢山いても暇なので人数の調整があった方がいいのではないかな。また40分コースだけの子とかだと、その子たちが一気に終わると次に同じタイミングで初めての子達が来るので大変。
C	特にない	特にない
D	一緒に担当する予定だった子が来れなかったで、けっこう忙しかった。おとな店長は工場ブースと兼任だったので、ほぼ自分しかスタッフがいない。お店づくりには無料で資材提供できるということもあって、多くの子ども達が来た。最後の方は、お金があまりあるので、個人的に買いに来る子も多かった。	特にない
E	求人票が8人だったのに16人になったと後から聞いた。8人以上来たので返したら、それは困ると言われ対応に困った。	求人票がアナログだなと思った。紙ではなくて、ipadとか使ったら、時間管理とかしやすいのと思った。
F	大人店長が仕切っているブースだったので困ることはなかったけれど時間管理が大変だった。みんな机で作業をすると、ぶら下げている名札が見えなくて、名前が見えなかった。	室内ではなくて外が良かったかも。子ども達も多いから、タクシーが走っていて危なかった。
G	自分も子ども達も担当ブースで何をするのか分かっていなくて、何をしたらいいのか聞かれたけれどよく分からなかった。最初、ブース予定地は他の都合でうまっていたので作業ができなかったので大変だった。	もう少し子ども達が、自分が何をするのか分かっておいた方がいいのではないかな。最初にリングドーナツを1袋づつ入れる作業があったが、子ども達は何をするのか分かっていなかった。
H	子どもを集めて指示を出すとき、ザワザワしだしたときに、声が通らなくて大変だった。仕事中に宣伝に行行って帰ってこない子とかがいた。仕事をしに来た子が、買いものなどをして持ってきたものを忘れて帰る子がけっこういたので、市役所までよく行った。	働く人数が多すぎてやることがなかった。店の前に座れるのは2人なのに働きに来る子が5人いた。そんなにお客さんも入らなかったで働く人の人数が多かった。
I	仕事する？遊ぶ？と聞いても、何かさせてあげたいけど、何をしたらいいか分からないでいる子がいた。迷っている子がいたら、誘導してあげた。お昼も一人で食べている子がいたので話しかけたりした。	環境的にはよかったが、走ったり、車いすで走ったり、危険な子がいたので、もう少し注意喚起した方がよかったのではないかな。
J	マニュアルがなくて軽く書いてはあったけど、起業する人がいないと仕事がない。でも働きに来る人がいるからどうしようってなったけど、紹介カードを書いてもらったり、ポスターを書いてもらったりした。	ごちゃごちゃ、ザワザワしているから、音も通りにくい。放送も聞こえにくいからもう少し聞こえやすくした方がいいかも。おとしものの放送も市役所で流しても聞こえていない気がした。
K	子ども自身が接客の仕方を知らないから、無口でお金のやり取りをしていたので、「渡すときに何て言うんだっけ？」とか、勝手に相手の財布から取ったら泥棒になるよと言ってサポートした。その後、挨拶をしながらやり取りができるようになって、そのやり取りが楽しかったと言っていたので、接客コミュニケーションを取った方が楽しくなるのかもと思った。	仕事をする子の割合が多くて、暇な子がいた。仕事を分担させて交代させてやっていた。60分は結構長い。小さい子とかにはつらいのではないかな。
L	最初はすることがなくて何をしたらいいのか、どこまで言ってあげたらいいのか分からなかった。やることリストはあったけれど、拭き掃除だけだった。そのうち子ども達がやることを決めて、ホームセンターに行行って、工場でほうきを買ってきた。	何をするのか細かく決めていた方が、やりやすかった。マニュアル自体が白紙だった。
M	落し物が多かった。500みらいのお金が1枚落ちていた時に、6人くらいが一気に自分のモノだと言ってきたときの対処が大変だった。忘れ物のお金が集まってから、渡すために、また来てもらうように促した。仕事が特になかった。落し物の放送に5人もいらなかった。	一人でいる子がけっこういる。仕事を終えて遊びに行きたいけれど、一人だからどうしたらいいか分からない子が寂しそうにしていた。少し一緒にいてあげて送ってあげたりしていた。
N	銀行は他の仕事に比べてやることが少なかったからか、あと何分？と聞いてくる子が多かった。お金のやり取りが難しいかなと思う子もいた。税金の説明をし忘れる子もいたので、しゅっちゅう声かけをした。銀行の仕事内容と、仕事にやってくる人との割合が合わなかった。	店長がずっと縛られていて、時間があるときとか退屈そうだなと思った。店長の時間がもう少し短くてもいいかもと思う。同じ作業が続いていてしんどそうだなと思った。
O	区担当の時に、30人中14人しか集まらなくて、手続きが大変だった。お弁当を一人で食べる子が多くて、一緒に誘っても、一人でいいという子が多かった。	密閉されている感じがするから、窓のあるところの方がいいかもしれない。光が見えていた方がよいのではないかな。
P	最初の段階と、お昼の段階で並んでいた。仕事を持っていなくて、なかなか自分のやりたいことを見付けられない子に、何が好き？と聞いてもうまく見つけられなかった。	仕事か、求人票を渡すだけのものだったから、他には最初に地図をつくるというものはあったけれども、他にもすることがあった方がよかった。
Q	朝とお昼が大変だった。	仕事ができることがなくて時間を持て余している子がいた。仕事の番号を渡す求人ボックスの仕事か、何をしたらいいの？という子が多かった。

(3) Q3. 全体の様子をみた感想について (表 9)

「全体への印象」については、学生達が担当したブースによっては、全体の様子を見れた者（回答者 B, C, G, H, I, J, L, M, N, O, P）と見れなかった者が存在していた（回答者 A, D, E, F, K, Q）。全体を見れた者は、良いイメージを語っている者（回答者 C, I, J, L, M, N, O, P）と、マイナスイメージや注意点について語っている者（回答者 B, G）がいた。またその内容は、子どもの様子に注目している者（回答者 B, G, H, I, L, O）と、街の様子や仕組みに注目している者（回答者 C, J, L, N, O, P）とがいることが読み取れた。

以上の結果より、スタッフとして多忙なブースを担当した場合は、全体の様子を見れない者も出てくるが、見れた者については、子どもがつくるまちがどういうもので、どのような仕組みで回っており、また子ども達がどのように過ごしているのかを、実際に見て体感する機会となっていることがうかがえる。

表 9 インタビュー結果

対象者	Q3.全体について
B	車いすの子たちが危なそうだった
C	税金で公園をつくっているのはすごかった。「動物の森」のゲームでみんなで何かをつくるという取り組みがあるけど、そうやって仕事の仕組みとかたえ興味がなくても、勝手に頭に入ってくるんだろうなと思った。また税金の大事さなども分かるなと思った。
G	全体はあまりみれなかった。スパイにグラサンをかけているチャラい子がいた。
H	何かモノを落としても気づかずに歩いて行ってしまう子が多かった。
I	みんな仕事好きそうだなと思った。市役所、税務署、銀行とかがお金のやりとりなどがあって、大人になった気持ちになるんだろうなと思った。
J	ただお店を作るのではなく、みんなで投票をして、後から街に必要なものを追加するというのが、街っぽい。あるものだけでなく、後から追加されたり、子どもの意見も反映させるのがいい。
L	起業している子がいた。お昼一緒に食べた子がカフェで飲み物やケーキを提供していたと言っていて、リアルだなと思った。
M	あまり全体はみれなかった。楽しそうだなと思った。
N	チョークアート、バルーンアートが気になった。
O	人気店はすごい人気だけど、そうではない店もあって、子ども達の好みがはっきりしているなと思った。
P	まちは全体をみれた。仕事の求人票を各店に回収に行くときに、いろんなお店についていて、こんなお店があるのだと思った。時間を知らせるチンドン屋さんがよかった。

(4) Q4. 楽しかったことについて (表 10)

全体的に子どもとの関わりの中で楽しさを述べている者が多かった。その中でも、学生側から子どもに対して何らかのアクションを起こせたことが楽しかったと述べている者や（回答者 B, C, F, H, K, Q）、子ども側からアクションがあったことについて楽しさを抱いている者（回答者 G, J, O）、またその両方として子どもからのアクションと自分からのアクションの双方向のコミュニケーションが楽しかったことをあげている者もいた（回答者 A, L, P）。このような回答は、自分と子どもとの直接的な関わりの中で楽しさが見出された内容であるが、一方、街の様子や仕組み自体を述べている者や（回答者 E）、子どもの様子を一步離れて見て「こんな子どもがいた」という風に、楽しさを見出す者もみられた（回答者 G, I, M, N）。

以上の結果より、学生がスタッフとして関わることで、子どもとの関係性が生まれたり、子どもが楽しんでいる様子を見たりして、「こどものまち」との間に学生が関係性を創造していることがうかがえる。

(5) Q5. これはすごいなと思ったことについて (表 10)

「すごいと思う内容」については、質問の際に、各ブースのことや、街全体のこと、子どもの様子や大人の様子など、すべてを対象として回答してよいことを指示した。その結果、17 人のうち 8 人が子どもの「すごさ」を取り上げていた（回答者 A, B, F, H, I, L, N, Q）。例えば、「とても素直だった（回答者 A）」、

表10 インタビュー結果

対象者	Q4.今回参加してみて楽しかったことはあるか	Q5.「これはすごいな」と思ったこと
A	子ども達との会話。また働いていた子が食べに来てくれたこと。最後に新聞の号外が配布しきれなかった子がいたので、一緒に配ってあげた。	子ども達がとても素直だったこと。まだお金を払っていないのにジュースをもらってしまった子がお金払ってないとちゃんと言ってきたり、自分の仕事をちゃんとせつとこなしている様子など。働きたい子が多かったようにみえた。
B	子ども達が楽しそうにしていたこと。区担当として誘導するのも楽しかった。	子ども達はすぐに真似をして、仕事を覚える。1人の子が横の子のことを真似して仕事を覚えていた。
C	子ども達としゃべったこと。自分の担当している区以外の子ども達としゃべれた。	全部。仕組みも、市長が動かしていくのもしっかりしているし、子ども店長がうまくお店をまわるようにアドバイスしていたことなど。
D	子どもから手紙をもらった。また来たいと言われた。	チョークアートをみてすごいと思った。紙粘土？で作られた和菓子がとってもリアルだった。
E	工場だから市から依頼されて仕事をする。みんなで頑張ろう！となった。	公共施設をみんなで投票して決められること
F	自分達でも何か作っていいよと言われた。 Cutter など使わせなかったけれど、代わりにやってあげたりした。	子ども達が自分たちで工場で作ったものをデパートに売りに行っていて、いつの間にか売れた！と戻ってきて、積極的で「すごいな」と思った。お金は店舗としては儲かったが活用ができなかった。
G	お店が回りだしたら子ども達は楽しそうだった。あと何分？と聞いてきた。一番大変だったブースかもしれない。衛生面も気にしないといけないし。手を洗ってもそれをチェックすることもなかった。	ホームセンターのところで。使用し終わったテープの針を再度使って眼鏡をつくっていた。パルーンアートもすごかった。
H	子どもが店で働いている姿を見るのがよかった。お弁当を食べるときも、子ども同士で自分のブルーシートに入れてあげていたりして仲良くなっていた。	案外子どもだけでも色々できていた。宣伝方法とかもって聞かれるものと思っていたけど、子どもたちでアイデアが出てきていた。小さい子の意見も拾ってあげていた。こども店長に聞かないでも子ども同士で仕事の方法を教えてあげていた。
I	子どもと関わるボランティアなどが初めてだったので楽しかった。	全部。子ども達が考えてやっている感がすごかった。花屋さんなのに、しおりを売っていたり、ネイルアートなどもあったり、子どもがやりたいことが詰まっていた。
J	子どもとコミュニケーションが取れて、特に働いていた子がお店をまわっているときに声をかけてくれたり、覚えてくれたのがうれしかった。	ホームセンターが利用目的によって無料とか、お店をよくするためであれば無料でいいという仕組みを分けているのがすごい。あとは税金を納めるのがリアル。納税をする流れをつくっているのがすごい。
K	歩いているときに、初対面でも店でも話しかけたりするのが楽しかった。	大人の専門の人がいて、思っていた以上にリアルな体験。薬屋には機械があるし、車いすタクシーの発想も面白かった。仕事カードを外に出したら、いつの間にかすぐになくなっていて、ハローワークの誰かがすぐに取りに来たのかなと面白かった。
L	子ども達と関わるのが楽しい。一緒にしゃべりながらどうしようってなったり、途中で話しかけてくれたりした。	子ども達が街に流す曲を、どんなものを流してほしいかリクエストしてきて、ちゃんと聞いて流しているのがいいなと思った。
M	ずっと楽しかった。市役所の歌を作った子がいて、そんなことするの？っていう発想を持っていた。その子が博物館を起業してすごい！！と思った。	子どもだけでやっているゲーセンなどのブースと、大人がいなくてできない専門のブースと、どちらもあって、できることの幅が広がっていくなと思った。
N	全体的に楽しかった。子ども達はすぐに溶け込んでいる。	子どもが仕事をすぐに覚える。店長が詳しく説明できることや、一度聴いたら子どもも分かっていることなど。
O	一緒にまわろうって言われたりした。色々な店舗を回ったけれど、店長がしっかりしている店が多かった。新しい子がやってきても臨機応変に対応している印象があった。	スケールが大きい。空間も店も大きい。
P	店長にアイデアを言ってみたら、楽しそうに仕事をしていた。	仕事がいろいろあって、ハローワークで人が多いから減らすとか求人がほしいから増やすなどの人数調整がされていたこと。
Q	子どもだけでやりとりをしているのを見るのが面白かった。仕事を覚えるのが、子ども達が早いなと思った。慣れてきているのが分かる。大半がすぐにわかってすぐにやってくれる。	全体的に感動した。子どもだけでここまでするのがすごい。段ボールを使って博物館を1人でつくった子など、そういうのを自分達でやっているのがすごい。どうやって仕事まわっているのか普通は分からないけれど、でも、自分から起業をしたりして動かしている子もいるからすごい。税務署に行ってくるとか、社会の仕組みなど、そういうことも分かっている。

「すぐに真似をして仕事を覚える（回答者B）」、「積極的ですごいなと思った。（回答者F）」、「案外子どもだけでも色々できていた（回答者H）」、「自分達でやっているのがすごい（回答者Q）」といったように、子どもの様子を賞賛している内容がみられた。

また子ども以外のことについては、「まち」の仕組みやそこに存在するモノに注目する者もいた（回答者C, D, E, G, J, K, M, O, P）。仕組みについては、市長が街を動かすことや（回答者C）、公共施設のあり方を市民で決定できること（回答者E）、仕事が予想以上にリアルであること（回答者K）等があがっていた。

以上の結果より、「こどものまち」スタッフとなることで、学生がこれまでに持っていた「子どもはここまでならでできる」という子ども観を変化させる機会を得ており、またそれが子どもの意見を主体的に生かす「こどものまち」において可能となっていることを知らせる機会となっていることがうかがえた。

(6) Q6. 次回の参加有無について

17名の学生全員が、機会があれば次回も参加したいと述べていた。

4 考察及びまとめ

本研究では、住まいへの主体的な関わり方について、家庭科における展開の手がかりを探るために、子どもが街をつくる活動に注目した。そして当日の学生スタッフが、子どもの主体的な地域への関わり方や、大人側のサポートの姿勢についてどのような学びを得ているのかをインタビュー調査により探った。

事前説明会では、ある程度当日の流れや街の仕組みなどが示されていたが、実際に参加すると学生達は「こどものまち」という仕組みの中で、子どもへの対応の難しさや子どもが予想外に行動できることへの驚きを感じており、子ども観を変化させるきっかけとなっていたことがうかがえた。このように地域づくりにおいて子どもが何をどこまでできるのか感覚として知っておくことは、家庭科の地域に関する学習指導をする上で必要となる素質である。また子ども達が自分の住む場所に主体的な関わり方をするために、どのようなサポートができるのか、子どもとの距離感や行動の仕方を感覚として知っている大人が多ければ、学校内外で子ども達が今以上に自分の場所を自分でつくる活躍の場を増やすことに繋がる。

日本の「こどものまち」は、ゼロから子ども達のつくりたい「まち」を創造させることが多く、マニュアルがない状況でその場での対応が求められる。しかし学生の中にはマニュアルがなく子ども自身に任せるような活動に慣れていない者もいた。マニュアルというのは大人側の運営のカンペであるが、本当に子ども達の主体性をサポートできるようになるためには、その時々生まれる子ども達の気づきや言動を軸に動けるようにならなければならない。それが事前説明会と当日のサポート活動だけでは、習得することが難しいことがうかがえた。しかし「こどものまち」が、「子どもでもここまでできる」という子ども観の拡張の機会となっていることは確認できた。したがって、この活動への継続的な関わりが子どもを地域に関わらせるサポート力の育成に繋がることが考えられ、その究明が今後の課題といえる。

¹ 木下勇、卯月盛夫、みえけんぞう編著『こどもがまちをつくる』萌文社、2010

² 日本の場合は、「ミニ京都」（京都）、「ミニ大阪」（大阪）といったように「ミニ〇〇」の表記を入れる地域もあれば、「とさっ子タウン」（高知）、「マーブルタウン」（岐阜）といったように「〇〇タウン」といった表記、また「こどものまち高砂」（兵庫）、「北区こどものまち」（京都）といったように「こどものまち〇〇」というフレーズを使用する地域があるなど様々である。各「まち」によっては、立ち上げの時に子ども達自身が「名づけ」を行い、自分達で「まち」の名称を決定する場合もある。

³ 花輪由樹「日本最初の『こどものまち』の実態—1997年「ミニ香北町」の文献記録より—」『平成24年度日本建築学会近畿支部研究報告集』第52号・計画系、pp.497-500,2014.6

⁴ 文部科学省、『小学校学習指導要領解説 家庭編 平成29年6月』2017